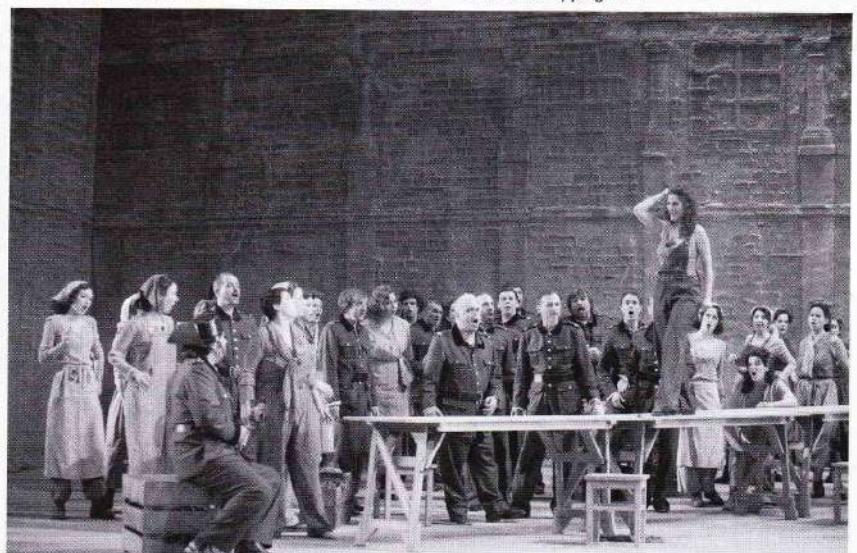




松明が印象的な《カルメン》第1幕（10月の日本公演に関しては別冊の巻末チケット・インフォメーション参照）©Marc Vanappalghem



ホセのヴェントレ（右）が好演



シンプルながら知性が光るベルナールの演出

10月に初来日するスイス・ローザンヌ歌劇場の《カルメン》を一足先に観た。周知のオペラを原典に忠実に演奏するところなにも清々しいものになるのかと驚いた。ディーデリッヒの音楽は、舞台はスペインでも、音楽はフランスものだと思い出させる。聴き慣れたアクの強い名曲ではなく、フランス・オペラ特有のレガートから湧き出るようなメロディだ。

密輸入業者の4人組は粒が揃つていて耳に心地よく、ミカエラのフルも、声の線は細いが、アリア以外は健闘していた。エスカミーリョのラボワントも品を保つて好演していたが、声はあまり飛ばないタイプだ。カルメン役のスルジアンはしっかりした声楽的基礎を持ち、演技も自然だが、カルメンとしては優等生過ぎる歌、隣のお姉さんの存在感では、カルメンのオーラが出ない。特筆すべきはホセのヴェントレだ。堅物な青年兵士が、カルメンの魅力に取り憑かれ、身を落とし、嫉妬に身を焦がされる結果まで的確に表現しつつ、高音の強靭な確実さと切ない歌い回しで酔わせてくれた。来日メンバーに入っていないのが残念だ。



日本公演のカルメン役はスルジアン（写真）、ゲルセワ、ドマシェンコのトリプルキャスト

# 古典的名作の《カルメン》に新鮮な発見！

スイス、ローザンヌ歌劇場で《カルメン》プレミエ

つた。歌手陣の見事なアンサンブルも、自然体の音樂とベルナール演出の等身大のドラマを体現していた。幕開けで闘牛士たちが十字架の前で祈禱の儀式をしているだけの演出で、観客の集中力を高めて一気にオペラの世界へ引き込んでしまう技は凄い。スペクタルとして成功しつつ、迫真的演技をも引き出していた。

密輸入業者の4人組は粒が揃つていて耳に心地よく、ミカエラのフルも、声の線は細いが、アリア以外は健闘していた。エスカミーリョのラボワントも品を保つて好演していたが、声はあまり飛ばないタイプだ。カルメン役のスルジアンはしっかりした声楽的基礎を持ち、演技も自然だが、カルメンとしては優等生過ぎる歌、隣のお姉さんの存在感では、カルメンのオーラが出ない。特筆すべきはホセのヴェントレだ。堅物な青年兵士が、カルメンの魅力に取り憑かれ、身を落とし、嫉妬に身を焦がされる結果まで的確に表現しつつ、高音の強靭な確実さと切ない歌い回しで酔わせてくれた。来日メンバーに入っていないのが残念だ。